Center for Transimperial History

CTHニューズレター

第2号・2023年2月

目次

CTH イベント 1
CTH 研究会 3
口頭発表 4
CTH メンバーによる研究成果 4
編集後記 5

CTHイベント

クリスティン・ホガンソン、ジェイ・セクストン両氏に聞く

共編書 *Crossing Empires: Taking U.S. History into Transimperial Terrain* について

山田智輝
（バーミンガム大学大学院博士課程・CTH 事務局員）

2022 年 12 月 2 日、間-帝国史研究センターは、第 2 回となる ‘Meet the Author Series’ をオンラインで開催した。今回の ‘Author’ としてゲストスピーカーに招いたのは、クリスティン・L. ホガンソン、ジェイ・セクストンの両氏である。ホガンソン氏は、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校歴史学科教授であり、研究関心は、1898 年前後における男性性とジェンダー・ポリティクス、交易と消費、後背地の歴史、そしてより大きくは、世界史的な文脈におけるアメリカ合衆国の歴史にある。一方でセクストン氏は、ミズーリ大学歴史学科教授を務めており、おもな研究関心は、19 世紀アメリカ合衆国の政治経済史にある。同氏は、蒸気機関をはじめとするインフラをつうじて、どのようにアメリカ合衆国が世界とつながってきたのかについて、数々の著作を発表してきた。

今回のイベントでは、アメリカ合衆国の歴史研究を牽引する両氏が編者として刊行した *Crossing Empires: Taking U.S. History into Transimperial Terrain* (Durham, NC: Duke University Press, 2020) をとりあげた。アメリカ合衆国の歴史を「間-帝国的な領域」に着目して再検討するという同書の挑戦的な試みを題材としつつ、新たな研究分野としての間-帝国史をめぐって、ゲストを交えながら参加者間で活発な意見交換がおこなわれた。

前回と同様に今回のイベントも、はじめにゲスト自身が自著を紹介するかたちで幕を開けた。まず、ホガンソン氏が同書の出版を企画するにいたった経緯について話した。彼女によれば、間-帝国史に関心を抱く

Copyright © 2023 Center for Transimperial History

ようになったのは、アメリカ合衆国における輸入品の消費にかんする自身の実証研究での発見や、大学院生との学術的な交流がきっかけであった。さらに、とりわけ北米の学界において近年、トランスナショナル・ヒストリーがひとつの大きな研究潮流となり、新たな研究領域を切り拓いていることも、間-帝国史への彼女の関心を後押しした。しかし、トランスナショナル・ヒストリーは、「ナショナル」という言葉を用いている以上、その用語や視角ではアメリカ合衆国の歴史のある側面をとらえきれていないのではないか、という疑問が浮かんだという。その側面とは、アメリカ合衆国は国家であると同時に、ほかの多くの国家とおなじように、またひとつの帝国であったということである。したがって、帝国としてのアメリカ合衆国を、他帝国の歴史にも着目しながら、グローバルな歴史の文脈に位置づける必要がある。このような経験や考えをきっかけに、ホガンソン氏はセクストン氏とともに、アメリカ合衆国の歴史を間-帝国史的な側面から再考すべく、イギリスのオックスフォードにてカンファレンスを開催し、本書の出版に向けたプロジェクトに着手するにいたった。こうして 2015 年から 2016 年にかけて、両氏はトランスナショナル・ヒストリーから間-帝国史へと関心を寄せはじめた。また、そのころ、アメリカではドナルド・トランプが大統領選に出馬・当選し、イギリスでは EU 離脱が決定するなど、世界中でナショナリズムがふたたび高揚していたことも、同書を出版する動機のひとつになったと、彼女は語った。

アメリカ合衆国は国家であると同時に、
ほかの多くの国家とおなじように、
またひとつの帝国であった〔……〕。
したがって、帝国としてのアメリカ合衆国を、
他帝国の歴史にも着目しながら、
グローバルな歴史の文脈に
位置づける必要がある。〔……〕
ホガンソン、セクストン両氏の
共編書 Crossing Empires は、
これまで看過されてきた、
帝国としてのアメリカ合衆国の歴史と
他帝国の歴史とのさまざまな交錯を
見事に描き出し、
間-帝国史という視角から
歴史をみつめなおすよう呼びかけている。

つぎにセクストン氏が、本書の強調する 4 つの点について説明した。1 点目は、これまでナショナルな枠組みで論じられてきた移民の歴史に、間-帝国史という視角をつうじて新たな光をあてている点である。たとえば、同書所収のジュリー・グリーン論文は、パナマ運河地帯における移民労働者をとりあげ、彼らが帝国の境界を越えた点だけでなく、競合する諸帝国の体制にとり込まれつつも、それをみずからの目的に応じて利用することがあった点も明らかにしている。

2 点目は、近代国家の発展過程についてである。同書は、間-帝国史的な側面から、国家権力としてのアメリカ合衆国の台頭について再考している。ニコール・フェルプス論文は、アメリカ合衆国が「帝国」となるうえで、領事たちの仕事がはたした役割について検討している。また、ジュリアン・ゴー論文は、新たな統治技術としての無記名投票と、19 世紀の合衆国南部における隔離政策との関連性について考察している。セクストン氏が指摘したように、近代国家としての自立と帝国としての台頭は、分かちがたく結びついていた。そうしたグローバルな現象の一部として、アメリカ合衆国におけるさまざまな国家機構やインフラの発展は進んだのであり、そのことが合衆国を「ナショナル」であると同時に「帝国的」なものにしたのであった。

3 点目は、近年の歴史研究において、ますます採り入れられつつある、環境史の視点である。同氏いわく、環境史は、間-帝国史的な研究のさらなる発展が見込まれる分野のひとつである。環境史の視角から合衆国における毛皮の密猟について考察するジョン・ソルリ論文は、先住民の主権が脅かされるなかで、彼らやそ

Copyright © 2023 Center for Transimperial History

の主権と帝国との関係に密猟がおよぼした影響について論じている。

4 点目は、18 世紀の歴史にかんする先行研究についてである。本書の編者が記しているように、18 世紀、とりわけ大西洋世界を専門とする歴史家は、協力と競合の双方における帝国間の交流の歴史について触れており、明示的ではないにせよ、われわれのいう間-帝国史を描いてきたといえる。同書は彼らのアプローチを応用し、帝国のダイナミクスとヒエラルキーに注意を払いつつ、19 世紀後半から 20 世紀前半に焦点をあてている。

本書の出版の経緯や要点についての編者自身による紹介につづいて、参加者間で活発な議論が交わされた。最初に論点となったのは、同書および間-帝国史というアプローチが、アメリカ合衆国のナショナル・ヒストリーに与えうる影響についてであった。これにたいしてホガンソン氏は、入植型植民地主義をはじめとする主題についての研究が進んでいるにもかかわらず、合衆国では帝国否定論が語られており、また、歴史家のなかには、自国はイギリスのような典型的な帝国とは異なっていたという例外主義的な考えにとらわれている者もいると指摘した。彼女が強調したように、同書は、アメリカ帝国の歴史を世界史と接続しながら描くことにより、その歴史を脱例外化し、いまだ根強い帝国否定論に異議を唱えている。

第 2 の論点は、近代国家建設における間-帝国的な側面にかんしてである。本書が鮮やかに描き出しているように、アメリカ帝国主義は、他帝国との間-帝国的な交流や関係をつうじて生み出されたものであると同時に、そうした間-帝国的なつながりが合衆国の国家建設をも条件づけたのであった。議論のなかで指摘されたように、それは日本の場合にもあてはまる。日本は、近代国家として自立するとともに植民地帝国として台頭すべく、イギリスやドイツ、さらにはアメリカ合衆国からも思想や政策について学びとっていた。日本の事例が興味深いのは、関連するいくつかの問いを投げかけているからである。たとえば、しばしば言及される「西洋」と「他者」という分類は、間-帝国史とどのように関係するのであろうか。また、植民地主義は、西洋を起点にするという意味で一方向的なものなのであろうか。それとも、「非西洋」国家として、そのほかの「非西洋」民族を植民地支配した日本の例に照らして、多方向的なものと考えるべきであろうか。こうした点については、議論のなかで言及されたように、たとえば、CTH のメンバーであるダニエル・ヘディンガーや東栄一郎による一連の著作が、植民地主義の重層性について考えるうえでの重要な事例研究として参照されるべきであろう。

3 点目は、歴史研究における分析単位としての「帝国」という概念そのものにかんしてであり、以下のような質問がなされた。間-帝国史という枠組みで諸帝国の関係を考えるさいに、どのように帝国を定義すべきであろうか。また、そうした帝国の定義は、これまで議論されてきた「非公式帝国」や「文化帝国主義」などの概念と、どのように関連するであろうか。間-帝国史を描くうえで、直接的な領土征服・支配をともなう帝国支配のありかたと、かならずしも植民地化をともなわない非公式な帝国支配のありかたとのあいだで、分析上の区別をどれほど設けるべきであろうか。

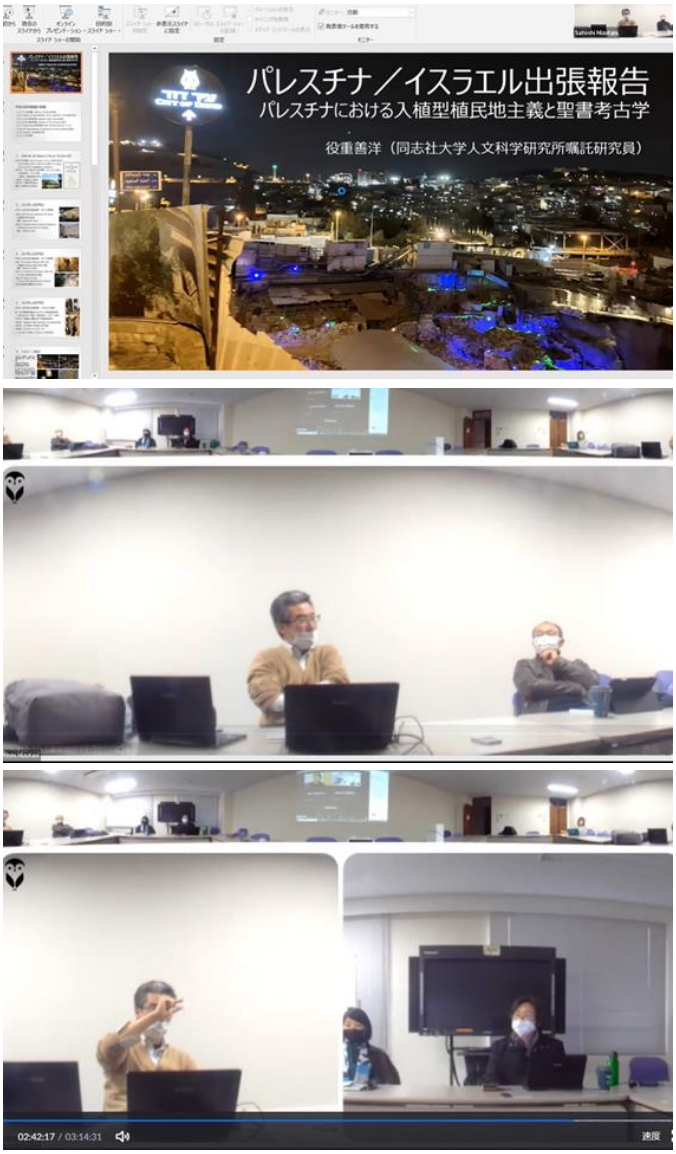
今回の ‘Meet the Author Series’ でとりあげたホガンソン、セクストン両氏の共編書 *Crossing Empires* は、これまで看過されてきた、帝国としてのアメリカ合衆国の歴史と他帝国の歴史とのさまざまな交錯を見事に描き出し、間-帝国史という視角から歴史をみつめなおすよう呼びかけている。

CTH研究会

CTH は、科学研究費プロジェクト「「間-帝国史」研究の理論と実践――開かれた研究枠組みの構築に向けて」（基盤研究(B) 2022～2026 年、研究代表者：水谷智、研究課題番号：22H00690）の一環として運営されている。その科研費プロジェクトの第 1 回研究会が、

Copyright © 2023 Center for Transimperial History

CTH のイベントも兼ねて 2023 年 1 月 22 日に開催された。同研究会では、同科研費プロジェクトおよび CTH のメンバーである役重善洋が、2022 年 11 月におこなったパレスチナ／イスラエル訪問調査にもとづき、「パレスチナにおける入植型植民地主義と聖書考古学」と題する報告をおこなった。その後の質疑応答では、イギリスないしイスラエルの対パレスチナ政策における考古学の役割、そして歴史認識やアイデンティティ・ポリティクスをめぐる現代的課題にかんして多くの質問が参加者からなされ、報告者を交えて活発な議論が交わされた。



口頭発表

山田智輝は、パリの社会科学高等研究院（EHESS）にて 2022 年 8 月 29 日から 9 月 2 日にかけて開催された、*Global History Collaborative Summer Institute* に全日参加し、8 月 30 日に 'Indians and Tanganyika: Colonialism, the Mandates System and Petitions to the League of Nations, c. 1914–27' と題するペーパーを発表した。

2022 年 10 月 13 日には、ナディン・ヘー、マリア・フランケ、水谷智の 3 名が、*Asian Association of World Historians (AAWH) Fifth Conference in Collaboration with India International Centre (IIC) (New Delhi)* にて、'Panel 2: Trans-imperial Perspectives on Indo-East-Asian Entanglements in the First Half of the 20th Century' と題するセッションを組んだ。そこではヘーが司会を務め、フランケが 'Help China—Help Yourselves: Trans-imperial Anti-colonialism and International Humanitarian Relief Work in China, c. 1938–1945'、水谷が 'Pan-Asianism, Indo-Japanese Solidarity, and Japanese Colonialism: Korean Unfreedom for "Asian" Freedom?' とそれぞれ題する報告をおこなった。

また、2023 年 2 月 22 日に東京大学で開催された、歴史家ワークショップ「第 2 回フランス語リサーチ・ショウケース：Ma recherche en 8 minutes」にて、友寄元樹が 'La gestion des indésirables : l'histoire de l'immigration en Nouvelle-Calédonie de la fin du 19e siècle' と題する発表をおこなった。

CTH メンバーによる研究成果

2022 年 9 月

役重善洋「「日本的キリスト教」と旧約学――1930 年代の浅野順一の預言者研究を中心として」『福音と世界』第 77 巻第 9 号、2022 年、24–29 頁。

Copyright © 2023 Center for Transimperial History

2022 年 10 月

Makoto Yoshida, 'Proving "Japaneseness": Passport and Identification Problems of Japanese in the Dutch East Indies', in Yumi Kitamura, Alan H. Yang and Ju Lan Thung (eds.), *When East Asia Meets Southeast Asia: Presence and Connectedness in Transformation Revisited*, Singapore: World Scientific, 2023, pp. 155–177.

2022 年 11 月

Satoshi Mizutani, 'Indians and Koreans in Crosscolonial Solidarity: Part II. Rabindranath Tagore and His Transimperial Encounters', *Transimperial History Blog*, 22 November 2022. https://www.transimperialhistory.com/indians-and-koreans-in-crosscolonial-solidarity-part-2/

水谷智・塩川伸明・戸邉秀明「植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する――板垣竜太『北に渡った言語学者金壽卿 1918–2000』(2021 年)を手がかりに」『社会科学』第 52 巻第 3 号、2022 年、53–79 頁。

2022 年 12 月

鶴見太郎「イスラエルが繁栄する陰で――リベラルな国際秩序の非リベラルな参加要件」『世界』2022 年、第 964 号、2022 年、191–200 頁。

編集後記

このたび CTH は、『CTH ニューズレター』第 2 号を発刊する運びとなった。また上記のとおり、CTH は 'Meet the Author Series' の第 2 回を開催し、前回に引き続きゲスト・スピーカーを招聘して、間-帝国史にかんする充実した議論を交わすことができた。運営にあたり支援してくださった関係者の方々に、この場を借りて感謝申し上げたい。

山田智輝

CTH 事務局員・『CTH ニューズレター』編集者

Copyright © 2023 Center for Transimperial History